

青年期事例に対する就労体験プログラムの実際

— 利用者と支援者の協働的モニタリングの意義 —

熊澤 真理

I 「はじめに」

本稿の目的は、青年期事例への就労体験プログラムによる支援過程を紹介することを通して、発達の課題に対する認知行動療法的介入と、利用者と支援者の協働的なモニタリングの効果について質的に分析することである。近年、発達の課題を抱えて就労支援の窓口を利用する若者が増加しており、短期の面接指導や就労セミナーにとどまらないアプローチも必要となってきた。本事例の分析を通して、青年期事例の就労支援に必要とされる体験型学習と、体験型学習に併せた認知行動療法的な介入や、利用者と支援者の相互評価の必要性について考察していく。

II 問題と目的

近年、若年者（15歳から概ね40歳）の就労支援は国の重要政策として位置づけられており、様々な公的支援が行われている。地域若者サポートステーション（以下：サポステ）は、若者を社会的・職業的自立へ誘導することを狙いとして、平成18年から厚生労働省の若者自立支援ネットワーク整備モデル事業として開始され、地方自治体との協働により（地域若者サポートステーション事例集，2009）、現在は全国110ヶ所に設置されている。サポステ窓口相

談には「就労したい」と話すが、実際は、親子関係が図れない、人間関係が築けない、精神医学的治療を必要とするなど、「不安で前へ進めない」「（前に進むことが）怖い」という就労前の様々な課題を抱えた若者や、その保護者が来所している。年齢に焦りを感じ、就労しなければならないと頭では分かっているが不安で一歩が出ない青年期、成人初期の若者、その若者の就職を願う保護者が来所しているが、若者が二次的障害を起こしている場合も少なくない。複雑化している状態への支援は、就労させる為の技術的な短期の支援にとどまらず、発達の課題に対する長期に渡る支援が必要とされている。現代の青年・成人を取り巻く就労状況の厳しさは、個別的な発達課題に関わる問題と、社会構造・産業構造の問題の相互作用の結果であると指摘されている（佐竹，2010）。

また、こころの相談やキャリアカウンセリングを数十回繰り返しても、実際の就職活動に移行出来ない若者が多く滞留している状態であった。若者達は「焦っている」と言いつつ、「不安」「自信がもてない」と話す。ではどのようにすれば、不安が軽減するのか、自信がもてるよう自己効力感が少しでも高まり、進路に向けて具体的に前に進めるのだろうか。以上の課題の解決に当たっては、実際の就労に向けての若者の行動を支えると同時に、自他に対する認知を変容させていくような取り組みが必要ではないか

と考え、筆者が所属するサポステにおいて「働く疑似体験」として就労体験プログラムを実施することとした。当該プログラムにおいては実際の事業所において就労支援プログラムを実施するとともに、プログラムに併せて認知行動療法的な介入を行っている。認知行動療法的介入のなかでは、利用者と支援者の協働的モニタリングに力点をおいているが、その目的はセルフモニタリングによる自己効力感の向上にある。

バンデューラは、自己効力感には、「①自分で成功する体験を持つこと（制御体験）」、「②社会的モデル（他人の行動）を観察をもって与えられること（代理体験）」、「③他者からの説得的な勧めを受けること（社会的説得）」、「④生理的、感情的状態を体験してみること」が関連しており、効力の信念はこの4つの主要な影響力によって育てていくことができるとしている（Bandura, 1997）。

一方、カウンセリング場面ではこれまで、クライアントの自己への気づきが重要視されてきた。そして、それは他人に強制されて生じるものではなく、あくまでもカウンセリング過程の中で自発的に生まれるものであると考えられてきた。ところが、カウンセリングのプロセスの中で自発的に気づきが生じるまでにかなりの時間が必要とされてきたことも事実である。セルフモニタリングは、クライアントの自発性を決して損なうものではない。何らかのストラテジー（方法）を用いることで、他人に頼ることなく、自分自身で望ましい方向に変化させようという、あるいは、望ましい状態を維持しようという努力を意図的に行うことである。いわば、自己への気づきを合理的に引き起こす手助けをするものがセルフモニタリングである（坂野, 1995）。坂野は、治療の初期に用いることによって、セルフモニタリングは患者の標的症状を具体的に明らかにするのに有効な方法であるとし

ている（坂野, 1995）。

本稿では、これまでカウンセリングや就労啓発セミナーのみの参加だった若者が社会的スキル獲得を目的として就労体験に参加し、どのような行動変容がみられたかを報告し、今後の就労支援での効果的アプローチ、支援のあり方について検討を行いたい。

Ⅲ アセスメント

事例（A）について、初回相談時から最初のアセスメントと介入結果までを以下に整理していく。なお、事例に対しては、研究目的を説明し合意を得るとともに、プライバシーへの配慮を行うことについても説明を加えて、了解を得ている。また、事例の概況についてはプライバシーへの配慮から個人が特定できないように、一部に変更を加えている。

Ⅲ-ⅰ 事例の特徴等

i) 事例の属性

A（30代男性）、無業状態

家族構成：両親、兄

教育歴：大学卒業

ii) 支援の実施場所

公共の青少年施設

iii) 支援期間

200X年10月～200X年（計4か月）まで

Ⅲ-ⅱ 窓口相談での主訴

「大学時代に就職活動をしたが、上手くいかず就職できなかった。6年程アルバイトも何もせず過ごしていたが、6カ月前から他の就労支援機関に通い、相談や就労啓発セミナーを受けているが、（その他の機関の勧めもあり）他の色々な人と相談したり意見が聞きたい。何も分からず（希望する職種など）自分が何に合っ

いるかが分らない。面接が不安です。」ということ話す。他機関を利用し、様々な就労啓発セミナーを頻繁に受け、相談も利用していると話す。これまでどの様な理由で就職活動が上手くいかなかったのか、説明出来ずに「思いだせないです。ふふふ。」とごまかしたような笑いをする。視線は合わさないが、自分が発言した後で一瞬チラッと指導員を見ていた。服装、特に帽子にこだわりがあるようで、身だしなみはきちんとしている印象。基本的に、自ら家族、友人、成育歴等は話さず、指導員の質問に一言、答えていくという状態であった。

親の勧めた高校に入学。大学は私立大学を卒業。大学時代はサッカーのサークルを友達とつくり4年間やっていた。その時の友達とは現在、年1,2回会う。自分から周りの人に相談することはない。どうしても困ったことは母に話すが、普段は話していない。小学校、中学校のことは思い出せないと言う。父親は自営業であるが、Aから見ると大変そうに見える為、父の仕事は継ぎたいとは思っていない。兄ともあまり話さない。経済的に困窮した家庭ではない為、Aの職業的自立が促されていないことも考えられる。

Ⅲ-iii 総合所見

Aの主訴は、いろんな人と相談したり意見が聞きたいということではあったが、これまで他機関での相談利用や形式的なセミナーには参加してきた。しかし、就職活動が上手くいかなかった原因や課題等、自分の意思が求められる質問を受けると「分らないです。」と回避的な発言がみられた。質問を理解していない訳ではなく、言語表出の少なさや過去の出来事を思い出せない(時系列で上手く話せない)状態であった。また、感情を表出する発言もなかった。認知的側面では、場にそぐわない不適切な「ふふふ」

という笑いや、セミナー・相談を受けてきたが、希望職種等何も分らないと発言する等、行動と認識のズレが感じられた。言語表出の少なさや過去の出来事を思い出せない(時系列で上手く話せない)という点から、これまでのように相談やセミナー参加を繰り返しては表面的な満足で終わり、就職活動での「面接不安」が軽減されることはなく、具体的な就労に向けていけない事が考えられた。Aが就労に向けて具体的な行動を起こす為には、まず普段、社会的にどのような回避行動が生じているかを明確にし、その対処方法から就労に向けての不安軽減を目指すことが必要だと考えた。

Ⅲ-vi 支援目標

就労体験に参加し、自らの行動特性を自覚すると共に(標的症状を明らかにする)、感情の表出や表現、就労に向けて緊張・不安軽減の対処、社会的スキル(挨拶をする、電話をとる、接客、不適切ごまかし笑いの軽減)の獲得を目指す。

Ⅲ-v 介入方法

基礎的就労体験プログラムへの参加。

基礎的就労体験プログラムは、約1ヶ月、週1日(計3~4日)、2時間半からの初歩的な(認知行動療法的)社会的スキル獲得(生活改善を含む)を目指したプログラムである。参加人数は2~3人。少人数制のチームで仕事を体験する。各現場指導員は1名、行動観察者1名(筆者)。Aは2カ所の青少年施設(B施設、C施設)で体験を行った。

B施設では、職員体験で主にPCを使って、チラシ作成や電話対応、窓口対応の初期対応を行う。C施設では、カフェ体験として、20~40人の施設利用のお客さんに対して接客をし、コーヒー・軽食を出す手伝いを行う。この就労

体験プログラムにおいては、接客や事務はあくまで手法であり、他者との共同作業の中で自分の認知・行動を認識し、観察者・指導員からの適切な言語指導、他者（他の参加者、観察者、指導者）からの言語賞賛やモデリングにより強化をはかりながら、個々の課題を乗り越えていくスキルを獲得する事が目的である。従って、体験（行動）を通した振り返り（観察者が主導、現場指導者も入る）こそが、今後（進路）に繋がる重要な作業である。

就労体験プログラムのポイントとしては、表1の通り、まず参加前に、プログラム参加における個人の課題目標を自ら立てるように促した。その際、少し頑張ったら乗り越えられそうな目標、終了時どのような自分になっていたかという視点での目標を立てることを重視した。また、難しい場合には、指導員や観察者も

一緒に考えた。さらに、体験前の研修2日間で、社会人としての基礎知識を学び、言葉遣い、姿勢、挨拶、身だしなみ等のスキルの習得を促すために、指導者がモデルを示してからロールリハーサルの為のロールプレイを行った。週1回の体験日には、「その日、頑張ったら乗り越えられそうな目標」をひとつ立て、2時間半の体験後に、同じく2時間半かけて、自己・他者への気づきについて指導員や観察者と振り返りを行い、体験の言語化を促した。自分が立てた目標の達成度、達成度は4段階評価（1. 全く達成できなかった 2. ほとんど達成できなかった 3. 少し達成出来た 4. 達成出来た）の自己評価を行う。今日どのようなことをしたのか自分が行った作業を書き、他者に向けて思ったこと（良いこと）、全体はどのような流れだったかを記録してもらう。その後、一人ずつ自分

表1 就労体験プログラムのポイント

①他者との体験を共有（2日間研修・ロールプレイ） 人と一緒に過ごすということで、他者との協調性や仕事の難しさに直面する。
②体験中の気づき（3日間体験：1日2時間半の体験） 一人で体験しているのではなく、周りに人がいる事に気づくことが出来る。経験を積む事、工夫をすることで出来る事が増え、失敗しなければ成功はないことに気づく。
③振り返りでの気づき（3日間1日2時間半の体験を通して毎回2時間半の振り返り） 参加者は出来ないことばかりに気を取られ、また一歩後ずさりしてしまいそうになる。参加者の多くはこれまでの様々な否定的経験に引きずられがちであり、働いている自分を想像するのは、難しい。振り返りとは現実と自己のギャップを、少しずつ時間をかけ丁寧に埋めていく作業である。この作業を怠ると、表面的には就労できていても、また直ぐに辞めてしまうという結果を生んでしまう。
④振り返りでの支え（毎回2時間半の振り返り・3時間の最終全体振り返り） 振り返りに時間を掛けることで、自己の課題に気づく。振り返りを一人ではなく一緒に頑張った者達（他の参加者、指導員、観察者）と行うことで、自分一人では気づけなかった自分の出来ている事に気づき支えられる。また、言語化させることで、自己または他者へ向けて意識づけさせる。
⑤次への積み重ね（全体の振り返りの中でその後について検討） 人によっては、1クールの振り返りの作業ではまだ、何か感覚的なものが掴めない人がおり、2クール連続参加する若者が増えている。

※このプログラムは体験2日目と3日目の間で一週休みを設定し、それまでに見えた課題について自分なりに取り組む時間を設けている。

の書いた内容（自分が思ったこと）を発表し全員で共有する。そこで、自分では気づかない事柄や、自分の知らない自分の側面、他者の考え方を知る。そして、自分が気になった事や上手くいかなかったと思う事を他者とどのように工夫し、乗り越えるのか検討を行う等、他者を意識する作業を毎行行った。

iv 結果

iv-i Aの回避行動

Aは自らB施設での事務の職業を知りたいということで、事務体験に参加することを希望した。観察者より、自分の課題に向き合う（成功体験だけでなく、失敗体験もある）ことになるが、逃げずに最後まで続けたら、次への具体的な目標が見えてくることを説明する。




しかし、1日目、長年Aが避けてきた電話対応の際に、他の参加者Dが素早く反応するという姿を見て「どうぞ」と譲り、一度も電話対応をしないまま終了していた。振り返りの際、Aは振り返りシートに『電話対応はもう少しスムーズに対応したい』と記入していた。観察者から一度も電話対応をしていないことを指摘すると「(参加者Dが)早くされるので・・・ははは・・・」とごまかし笑いをする態度が見られた。観察者からは、目標が『電話対応に慣れる』と記述しているが、対応を避けていては、慣れることは無く、課題のままである事を指摘する。次回2日目は対応する順番を決め、参加者Dのように、意識して出来るだけ早く反応していくよう伝える。また、体験中は指導員もおり、失敗出来る場であることを再度伝える。2日目、Aは自ら電話対応の工程表を作成し、関係書類を準備してきた。「これを作っておくと(不安が)少し落ち着く」と話す。観察者・指導員からは、何か工夫してくるようには伝えてはおら

ず、自ら不安軽減の対処法を考えてきていた。また、その日から出勤する時間も30分以上早く出勤し、その日の現場の様子をじっくり観察してから体験に挑むようになった。具体的に対処法を考え、それが社会的スキル向上さらには、社会人としても評価される行動であることを観察者、現場指導員から言語賞賛した。Aは声を出さずに笑いながら、頷く。その後は、電話対応を回避することは無くなる。早めに出勤し、事前準備（利用状況の確認や、対応に必要なものを用意しておく）を行うようになった。そのひとつひとつの行動に観察者、現場指導者が言語賞賛で強化した。

iv-ii 全体の振り返りシートが書けない

B施設での3日間の体験が終わり、一週間空き最終日の全体の振り返りまでに書いてきてもらう振り返りシート（体験前と比べて出来るようになったと思うこと、自分の強み、今の自分について）が自分では「どう書いていいのかわからない。思い出せない」と来所。観察者が不在だった為次の日に来所。観察者と一緒に具体的に1日ごとの体験場面を思いだし、体験前と体験後の変化について、電話対応、窓口対応の積極的態、挨拶について思い返す。観察者が「1日目のあの時、A君の声が小さかったから、(観察者)がもっと大きい声で言わないと相手に伝わらないよって言ったよね」と言うと、Aはしばらく考え込んで「あ～、で僕はこうやった。」とその場面とその日の流れは一気に思い出したが、3日間の流れは出てこなかった為、最終的に「3日間の流れはこんな感じだったね」と観察者主導で3日間の流れを声にだしながら図に書いて確認。Aはその中に出てきた言葉を短文又は単語でシートに記入した。自分だけでは、一から思い出すことは難しいようであった。しかし、C施設での振り返りではシートの記入文

表2 B施設における振り返り

B施設(1カ所目)における振り返り (本人振り返りシート及び観察者の記録から引用)			最終評価 (全体振り返り：本人振り返りシートから引用)
本人の目標設定： 事務のイメージをつかむいろいろ学ぶ 接客・電話対応に慣れる。			自分の強み： ・真面目・慎重・明るさ・従順・適応力
本人の振り返りおよび達成度の自己評価	観察者からの 言語的リフレクション	体験前と比べて出来るようになったと思うこと： ・電話をとる ・電話対応を学んだ ・体験の日は早起き ・とりあえず来客対応した ・挨拶をたくさんした ・愛想よく	
目標：1日目 ・慣れる・学ぶ (接客、電話対応)	・達成度3 ・電話対応はもう少しスムーズに対応したい ・スピーディーに対応したい 	・目標である、電話対応を避けた事を指摘。やりわりと自分の行動をごまかそうとしている態度が見られることも伝える。	今の自分： ・初めはあまり積極的に対応をしていなかったが、振り返りで折角の体験なので、失敗してもいいから、チャレンジしようという話題になったので、体験をするごとに対応を早く、積極的になったと思います。 ・聞き上手な感じ・電話は相変わらず緊張する
目標：2日目 ・電話対応(自然体・聴き取りをしっかりと) ・学ぶ(事務員から)	・達成度3(いったん2の評価を行った後に修正) ・電話対応は聴き取りがなんとか上手くなったと思う 	不安軽減の為、具体的対処法や、行動を起こせた事を言語賞賛。前回を活かしている事、目標が具体的行動を示していることを評価。 	
目標：3日目 ・緊張と緩和を上手くやりくりする ・施設利用状況を把握しておく	・達成度3 ・施設の利用状況を確認しておいたので、ある程度予測が出来た ・窓口対応を上手く対応していないと	利用状況を把握する等、事前準備を周到にしていることを言語賞賛。事前準備が緊張も和らげる要因になっている事を伝える。	
			体験終了後の感想： 「ある程度、イメージ(予習)してみたり、1日の予定を確認して準備ができていたので、体験する毎に緊張は減っていった。対応の仕方とかは全然だったので、もっと上手く対応したいと思った。作業をしながら、神経をつかってつかれた。これからは、自分の思ったこと感じたことを素直に出したいです(文章化)。アルバイトも具体的にしていきたい。」

注) 達成度は4段階評価 (1. 全く達成できなかった 2. ほとんど達成できなかった 3. 少し達成出来た 4. 達成出来た) 添付資料2も同じ。

字数も増え(表2)、体験終了後の全体の振り返りシートは、観察者、現場指導者に頼ることなく、自分で取り組んでいた。全体の振り返りの中で少しづつ自分の事を語る場面もあり、A曰く「失敗が非常に嫌で石橋を叩いても渡らなかった。これまで絶対に失敗しないよう大学受

験も合格が間違いないところを受けた」と話す。また、就職活動での「面接も怖い。履歴書が書けない」と話していた。

iv - iii 不適切なごまかし笑いの軽減

C施設の体験では、特に1日目は思っていた

表2 C施設における振り返り

C施設（2カ所目）における振り返り （本人振り返りシート及び観察者の記録から引用）			最終評価 （全体振り返り：本人振り返りシートから引用）
<p>本人の目標設定： 接客について自信を持ちたい</p> <p>本人の振り返りおよび達成度の自己評価</p> <p>観察者からの 言語的リフレクション</p>			<p>自分の強み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明るさ・真面目 ・適応力（最初、どうなるかイメージ）できなくて、一気に来られた時はパニックしたけど、2回以降はうまく対応できた） ・気配り（業務を円滑に行えるように考えて行動できたと思う）
<p>目標：1日目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仕事を覚える（慣れる） ・声を大きくはきはきと ・明るい対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・達成度2 ・緊張はしなかった ・明るい対応はある程度出来たと思う ・パニックになった 	<ul style="list-style-type: none"> ・パニックにはなったが、自ら指導員に声をかけ、指示されたことが行えた事を具体的場面を説明。思い出させながら、切り替え出来た事を評価。緊張はしていたように見えたと伝える。 	<p>体験前と比べて出来るようになったと思うこと：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調理の状況を見てお皿を用意したり、早くお客さんにお出しできるように心掛けた行動できた。体験するにつれて声を大きく、ハキハキと対応できるようになったと思う。仕事が覚える（慣れる）ことが出来た。 ・開店準備をしっかりして、業務に臨むことが出来た。お客さんが一気に来る事が予測でき、準備が出来た状態で業務に挑むことが出来た。指摘された対応の仕方を少しは改善出来たと思う。
<p>目標：2日目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・声を大きく、はきはきと ・今回は来客が倍になるので、パニックせずに対応したい 	<ul style="list-style-type: none"> ・達成度2 ・焦って周りをみておく余裕がなかった。 ・前回よりパニックなし・対応をもう少し丁寧にしたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前準備をして来た為、パニックを回避出来た。人が多かったが、Aが余裕がないようには見えなかった事を伝え、声をもう少し大きくするよう指摘。 	<p>今の自分：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感想をスラスラと書けたり、伝えたりできるようになりたい ・接客に対する不安が体験前にあったが、やってみるとうまく出来たので、自信になったと思う。 ・業務がどうすれば円滑にいくか考えて行動できた・料理をもって行く際も、ただ持つて行くだけでなく、周りの事を気にしながらもっていけていたら、もっとうまくできていたと思う。 ・方向性がなかなか明確にならない・書類・面接に不安がある。
<p>目標：3日目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回は誠実な対応を試みる・前回の時にマズイ（言葉足らず、敬語）があったので丁寧に対応したい。スタッフの方とコミュニケーションをして、円滑かつミスなく業務を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・達成度2 ・準備が出来ていて、余裕があったので、業務がうまく行えて満足します ・スタッフの方と協力出来て円滑に行えてよかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の接客態度は丁寧であり、誠実であった為、お客さんからの良い反応があった事を話す。仕事に対して意欲的な姿勢になっている。スタッフの方にも、気を配る等、余裕が出てきている。一緒に取り組んでいる事をAが実感しているように感じると伝える。 	<p>体験終了後の感想：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体験する度に改善したい点を次に生かし、業務がうまく行えていったので、良かったです（うれしいです）。スタッフとコミュニケーションをとって円滑に行えた。カフェに興味があったので、体験から行えてよかったです（朝早く来て、手伝えたのもよかった） ・接客に関しては、体験前はうまく出来るか不安があったが、やってみると案外上手くやれたので、少し自信になった（もう少し改善したい点があります）。 ・振り返りで自分の感じた事や感想を書いたり伝えたりすることが難しい・・・語尾がへらへらしてしまうクセを意識して最後の体験で誠実に出来た。<u>楽しかった。達成感、充実感。</u>

よりも人が多く来所し、順番に決めていたことが順番通りにいなくなり、次に何をしたら良いのか分らなくなり接客対応を避ける場面もあったが、「何をやればいいですか?」と自ら指導員に聞く事が出来る。指導員が次に何の作業をやれば良いか指示をだすと、落ち着きを取り戻した。振り返りの際、Aはパニックになったと発言していたが、観察者からは、自ら指導者に尋ねたこと、観察者や、指導者が指示した事は取り組み、切り替えが出来た事を言語賞賛し評価した。2日目には自分なりの仕事の流れを表した対応メモを作成し、体験前の事前仕込みも1時間前に来て指導員を助けていた。その中でAは、お客様の人数が多くても落ち着きながら対応できていたが、注文確認をする際に「ふふふ・・・」と声に出していたので、お客様に注意される。3日目には、前回注意されたことを意識して対応することにより、ごまかし笑いをすることなく対応出来ていた。

挨拶については、B、C施設の体験中に観察者、各現場指導員から「声が小さいため、遠くに届ける気持ちで目線を上げて、目を見づらかったら眉と眉の間を見て。」とモデルを示しながら繰り返し伝えていると、次第にAの声は大きくなり、お客様から返事が返ってくるようになった。C施設の最終日では、お客様、施設職員から「堂々としている」と言語賞賛されていた。

V 考察

本事例では、行動観察者（筆者）だけでなく、2カ所での就労体験を通して複数の現場指導員との相互行為の結果、Aは自らの回避行動を自覚し、自らの対処法として事前に準備を行い、予想を立てながら取り組むと意欲的に落ち着いた行動が出来ることを学習した。職業観を学ぶという目的でAは就労体験に参加していたが、

実際は、社会人としてのスキルの獲得と同時に、これまで逃げてきた自分の社会的スキルの課題等に向き合う事になった。これまで逃げてきた課題に今回向き合うことが出来たのは、やはり一緒に課題に取り組む支援者がいるという事が一番の要因ではないだろうか。支援者との信頼関係のもと、これまで一番の恐怖であった失敗することへのチャレンジを可能にし、パニックが起きても切り替え、対処方法をみつけていく中で自己効力感が生じ、意欲的な行動の変化に結びついたと考える。観察者、現場指導者、他の参加者と毎回振り返りを行い（くせづけること）、言語化（話す、書く）することで、2カ所目の体験ではAの記述量も増えてきた。1カ所目では、Aの主観的記述評価は、緊張している様子であっても緊張はなかったとする等、支援者達の評価と認識のズレがみられたが、振り返りで支援者と認識のズレをすり合わせていく事や、体験中に支援者が積極的にリフレクトすることで日を増す事に評価が一致していく過程がみられた。積極性が増したAは、その後単発バイトに行くようにはなったが面接は受けに行けない状態であり、今後もさらなる社会的スキルの向上、今回獲得したスキルの継続を目指し、支援者との協働的行動アプローチプログラムへの参加が必要だと思われる。

当該の若者サポートステーションには、このような支援者のサポートを求めて多くの若者が利用している。就労体験も体験待ちが出ている状態であり、複数の他機関からの継続的な参加者も増加してきている。

しかし、この就労体験プログラムの評価基準は、Aのスキルの獲得も含め、現在のところ本人、支援者主観で曖昧な部分がある。アセスメントをはじめ、プログラム参加前に標的スキルの明確化、評価基準が必要だと考える。また、プログラム全体としては、言葉のやりとりが多

く、一日の予定やプログラム全体の流れを工程表で貼り出す等、視覚的アプローチや支援を取り入れていかねばならないと考えている。

本事例を通して、就労支援における就労体験は、仕事を通して利用者と支援者が一緒に協働でアセスメントを行う事により、より一層実際の就労現場に近づく支援目標の設定を可能とすることが分かり、アセスメントツールとしての役割も大きい事を学んだ。また、複雑化し長期に渡る支援が必要とされている就労支援現場において、アセスメントの難しさ、不十分な点を改善すべく、アセスメントツールの充実は今後の必須課題であるとする。

引用文献

- ・アルバート・バンデューラ, 編 (1997). 激動社会の中の自己効力 (本明寛・野口京子, 監訳. 本明寛・野口京子・春木豊・山本多喜司, 訳). 金子書房.3-5.
- ・公益財団法人 日本生産性本部 地域若者サポートステーション事例集 平成21 年度版、86-87.
- ・坂野雄二. (1995). 認知行動療法. 日本評論社.21-22.
- ・佐竹真次. (2010). 思春期・青年期・成人期分野における臨床発達心理士の実践21 の実践から学ぶ 臨床発達心理学の実践研究ハンドブック.163 一般社団法人 臨床発達心理士認定運営機構 日本臨床発達心理士会 金子書房.